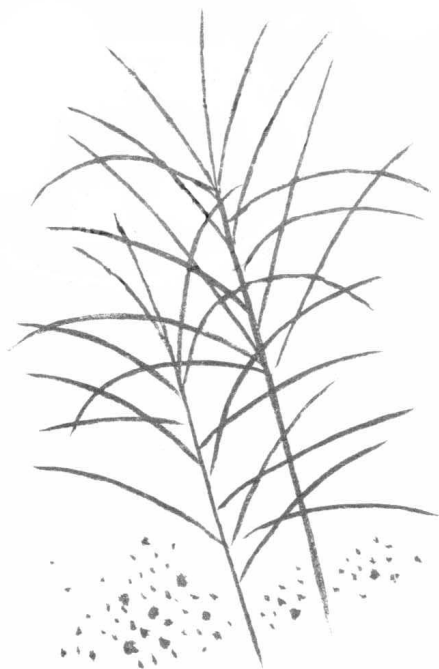


志賀島 岡松和夫



志賀島

岡松和夫



文藝春秋刊

著者略歴

昭和6年福岡市生まれ。東京大学文学部卒。

「壁」にて第9回文學界新人賞受賞。

表題作「志賀島」にて第74回芥川賞受賞。

〈著 書〉 小蟹のいる村（文藝春秋刊）

熊野（文藝春秋刊）

〈現住所〉 鎌倉市梶原1471番地 A 4 の401（〒247）

志賀島^{しまのしま} 奥付

昭和五十一年三月十五日 第一刷

著 者 岡松和夫

発行者 檜原雅春

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三番地

郵便番号一〇二

電話東京（〇三）二六五局一二一一

印刷 大日本印刷

製本 中島製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えをいたします

© Kazuo Okamatsu 1976 Printed in Japan

目次〈志賀島〉

志賀島

5

或る年の秋

79

蓄音機

129

碧空

175

闘花

221

収録作品発表誌一覧

252

卷頭口絵写真 自宅付近の著者（撮影・角田孝司）

志賀島

岡松和夫創作集

装幀
加倉井和夫

志賀島

一

学校から出発するのなら、一直線に港まで続いているアスファルトの大通りをいかにも整然と歩かされていたろう。しかし、集合は直接に志賀島^{しやがしま}行きの汽船の発着する博多港の船溜りだった。宏は三日間の海洋訓練のために、午前八時までにはそこに行かなくてはならない。彼はリュックサックを背負って、いつも学校へ通うのとは反対の方向になる港に向う路を歩いてゆく。その路は小家が密集し、一つの町内を通り抜けると、淫売屋の並ぶ辺りを行くことになる。格子のむこうに女たちの坐るカウンターがあり、男たちは格子の外から中を覗けるようになっていた。

宏は若い女に送られて店から出てくる男と会った。男の表情は生々としており、船員らしい帽子の白いカバーが印象的だった。女は男と小指をからめていたが、それをほどくと時計をはめた男の左手首をぎゅっと握るようにして別れた。男はそのまま歩いてゆく。男は宏を眺めて気持よさそうに笑った。しかし、宏はそれから眼をそらし、男からできるだけ後れるようにした。淫売屋は、朝見ると決して洒落たものではなかった。前夜の嬌声や歓楽が信じられないくらい、家は古びている。玄関は泥に汚れていた。

宏はこの近くの小料理屋の一つに竹元啓の母が仲居として働いていることを知っている。竹元の母は以前は宏の母と同じ派出所看護婦会に加わって病院などで働いていた。

もう半年ほど前になるが、淫売屋の並ぶ路から遠くない神社の境内が焼けた。神殿ではなくて脇の小さな建物が燃えたのだが、火の見櫓の真下だっただけに半鐘の音も激しかった。宏はそれを聞くと、祖母の制止もきかずに走って家を出た。

神社の隣には宏たちが淫売病院と呼んでいた大きな木造の建物があったが、高い塀に遮られて延焼の心配もなかった。法被姿の消防夫たちは安心して動いていた。それを遠巻きにした一団の男女のなかに、宏は竹元の母を見つけていた。竹元の母は昔宏の家に遊びに来たことがあった。その時とは違って首筋まで白い化粧姿だった。また、それが似合わないこともない若々しさが竹元の母にはあった。

宏は海岸近くを走る市内電車の線路に沿って、汽船の発着場に歩いていった。彼は竹元の家の前を通り過ぎた。小さい家で、電車通りに面しているせいか、格子もガラスも埃をかぶって汚れている。竹元の死んだ父は船員だと聞いていた。

発着場にはかなりの生徒が集っている。もう竹元もそのなかにいた。彼は普通の国民学校六年生よりずっと大きな体を持ち、顔立ちも悪くなかった。母親に似ているせいか、色が白く、すべすべした柔かい肉付で、肥満体に近いが、動作は敏捷だった。彼は何よりも相撲が強かった。校庭に屋根を構えた四本柱の土俵が作られ、横綱双葉山がそれを記念して学校を訪れた時、各学年から選ばれた生徒が次々に横綱にぶつかってゆく模範相撲が行われたが、その最後が竹元だった。相撲が体操の正科に加えられていった時代である。

竹元の体は同級生のなかでも際立っていた。それでも双葉山の見事な腹のあたりを押した手は、驚くほど小さく見えた。双葉山は終始微笑していた。その日は希望する父兄も土俵を囲んでいたが、竹元の祖母もその中に混じっていた。当時、双葉山は東京以外に博多近郊の太宰府に道場を持ち、学校などを巡回していた。それに、毎年のように地方場所が博多では開かれていた。その年の春場所も双葉山は全勝優勝していたから、大変な人気だった。東京両国の道場はもっぱら力士養成のためだった。しかし、太宰府の道場は普通人に相撲道を教えるということで、そこで訓練を受けた青年団が相撲をとり、力士の何人かも取組を見せた。力士たちはその日「力士規

七則」と呼ばれた双葉山道場の規律を、土俵上に並んで唱えた。そのなかには、次のような言葉もあった。「我等幸に万物の霊長たる人間に生まれ、万邦無比の皇国に臣民たり。敬んで臣子の本分を全うすべし」

宏がこれを覚えているのは、竹元がいつの間にか暗記して、よく口にしていたからだ。

小学生百人ばかりを乗せた臨時の汽船は漁船などが数十艘も繫留されている朝の船溜りをゆっくりと出て行く。出口は狭まっていて船二艘がすれ違える程度だが、その右岸に宏は竹元の祖母が立っているのを見つけた。

子供たちは、一般に同級生の親たちなどには無関心なものだ。しかし竹元の祖母の場合は違っていた。肥った体で、真夏にはよく諸肌脱ぎの姿になって垂れた乳房を隠さなかった。夕方の近所の用達などとはそんな恰好で済ませてしまうから、裸姿の竹元の祖母を宏は何度も見かけていた。顔だけでなく全身が赫く酒焼けしたようで、筋肉がゆったりと鬘を作って布袋さまのように垂れている。宏は一度「女相撲のようやねえ」と云ったが、その評言は竹元を不快がらせなかったようだ。

出入口の右岸には鉄工所が建ち、その前にも幾艘かの船がもやってあって、視野はそれらの船の船室やマストに邪魔されていた。今朝は白い浴衣のようなものを着ていた祖母の姿を竹元が見届けたかどうか分らない。竹元の祖母は自分の酒代を稼ぐためにその鉄工所の下働きをしている

らしいから、わざわざ見送りに姿を見せたわけでもなかったのだろう。しかし、祖母が竹元に期待をかけていることは宏もよく知っていた。

祖母の夢は、竹元を双葉山のような名力士にすることだった。そのために、近所の青年たちが作った相撲仲間に竹元は最年少で加えられていた。稽古はたいてい夕方から夜にかけて、空地で行われた。

あの頃は、あちらこちらの町内で青年たちが不思議にいろいろのことをやっていた。宏の町内では、青年たちの間で夜のマラソンが流行った。往復すれば一里ばかりになる宮崎八幡宮が目標で町内の路を一斉にスタートするランニングシャツ姿の何人かを見ることは楽しかった。宏の町には地方大会に出る程度のマラソン選手がいて、その青年が中心だった。竹元の町内の方では心から相撲好きな青年が太宰府の双葉山道場へ研修にも出かけていた。竹元が「力士規七則」を暗唱できるようになったのも、そのせいである。

宏は船が船溜りを出て暫くして、ようやく竹元の姿を見つけ出した。竹元は甲板ではなくて、下の船室の座席に寝そべって写真の載った相撲の本を眺めているのだった。殆どの生徒が甲板にいたのに、竹元は港の風景に興味がないらしかった。

「どうしたと」

「どうもせん」竹元は答えた。

「みんな上におるよ」竹元の祖母の姿を見かけたことは云わなかった。

「父ちゃんが生きとる時は、船にはよう乗せてもらうたけん、面白がっても仕方んなか」

「志賀島までどれくらいかかるとやろう」宏は話を交えた。

「一時間ばかりやなかかなあ。大きな汽船やけん。昔、父ちゃんと伝馬船で行った時は恐ろしかった。防波堤を出ると波が高うなってる」

「竹元は伝馬船も漕げると」海洋訓練のなかには、水泳や手旗信号やカタター漕ぎ以外に、伝馬船の練習も加わっている。宏の方は水泳と面白半分に少し覚えている手旗信号を除けば、何もかも初めてである。博多湾の先端にある志賀島にさえ、初めて行くのだった。

「少しは漕げるよ。こんな工合」竹元は手を動かしてみせたが、宏にはよく分らない。

「志賀島は波が荒からうね」

「父ちゃんは志賀島までは何でもなかと云うとった。それから先の玄界灘になると、時化の時はものすごくからしかけど」

宏の方は水泳も自信がない。宏は竹元に一目置いていたが、竹元の方も宏に対してはそんなところがあった。一方が国語や算術の時に目立つのに対して、もう一方は体操の時に際立つ。そんなことが理由だったが、互にもう父親を失い、母同士が顔見知りであることも関係があった。

下の船室にいても、船の揺れ始めたのが分った。

「ほら」と竹元が云う。

外を見ると、防波堤はもう大分後の方だった。

志賀島渡りの定期船は海ノ中道の西戸崎に寄るが、この船は志賀島に直行する。志賀島が眼の前に見えてくる。江戸時代に有名な金印を出土したこの島は周囲十一キロメートル、二百メートルばかりの山が起伏する形だった。

二

引率の先生は男の川田先生と女の花島先生である。しかし、志賀島に着いてみると、三人の海軍の下士官が指導者として待っていた。そして、三日間の海洋訓練は、その下士官たちを中心にして行われたのだった。

海岸に近い旅館の前に整列した国民学校六年生は、まず海軍の五分前精神について訓示を受けた。それから海軍精神注入棒についても、話を聞かされた。一番背の高い兵曹が、油で光ったような棒を皆に示したが、その棒は三日の間生徒たちを苦しめた。

休めの姿勢で話を聞いていても、天子サマという言葉が口にされると、気ヲ付ケの姿勢にならないといけない。その動作が遅いというので、「キサマラ」という怒り狂ったような罵声が響き、

六年生たちは最初から震えあがった。

午前中は海軍体操の後で手旗信号の訓練だった。午後からは水泳になった。海岸に赤い旗を結びつけた竹が並び、その内側を旗に平行に可能な限り泳いでゆく。訓練はつらかったが、それなりの爽快さもあつた。しかし、夕方近い頃生徒たちは砂浜に整列させられ、半歩の間隔を横にとらされると、腕立伏せの姿勢のまま動かない体罰を加えられた。理由は何事も機敏に行動できない生徒たちにもう一層の気合を入れるためらしかった。疲れた生徒たちが尻を下げたり上げたりすれば、兵曹たちの棒が容赦なく尻を見舞った。二人の先生たちはそういう光景を押し殺すようにして黙って見ていた。

二日目には、水泳のほかにカッター訓練が加わった。片側六人ずつ合計十二人の生徒が、長い櫓の一本一本を兵曹の命令に従って一斉に起し、倒し、笛に合わせて漕がなくてはならない。

それはひどく力の要る動作だったが、初めてのことだけに生徒たちは昂奮しきり、短艇と海と自分とが三巴に戦っているような錯覚を起したものだ。

例のように先生たちは何一つ口出ししなかった。訴えるべき親も身近にはいなかった。そのために、生徒たちは兵曹たちの命令に驚くほど忠実機敏に動く集団に変えられていった。

最後の日の事件がなかったなら、宏たちの海洋訓練は苛酷な集団行動の連続ということで、戦争中の同種の思い出の一つになっていたかもしれない。しかし、三日目は早朝から空は重く曇り、